

アウグスチヌスの聖餐論

小池三郎

聖餐の問題は、アウグスチヌスの回心後の全生涯にわたってなされた数々の論争にあっても、直接にその対象となることはなかった。また、聖餐を特別に問題とした著述も存在しない。むしろ、聖餐はかれの教会生活のなかで重要な位置を占めているために、彼の著述の随所で他の問題に関連して触れられなければならない、ときには彼の深い考察がそれにともなって示されている。最後の晩餐で、いけにえとしての自分の体と血を、パンと葡萄酒で示すキリストを伝える共観福音書とコリント前書、生命としてのキリストの肉と血にかかわるヨハネ福音書、完全ないけにえと司祭としてのキリストを示すヘブル書¹⁾などの聖書の根拠からも、アウグスチヌスは、それぞれの状況のもとに聖餐に言及している。

アウグスチヌスは「神の国」で、その想定する読者の種類からいっても、聖餐についての考えのすべてを、何の制約もなしに語っているとは思えないが²⁾、神の国に属する人々との関係において聖餐の意義を最も総合的に示していると考えられる。

また、教会での説教、特に、新しく洗礼を受けて教会に入り、聖餐に参加することになった人々に、彼が聖餐の秘跡 *sacramentum mensae dominicae*³⁾ について、簡単に、しかも何ら沈黙の制限なしに説明しようとした、いくつかの説教によって、教義上の基本的な考えが示されている⁴⁾。

アウグスチヌスが聖餐の秘跡の問題に触れるとき、かれにあっては、キリスト自身に対する、また教会に対するかれの考えと密接に結びついているが、私が今ここで意図するのは、それらすべての問題の体系化ではない。できるだけ主の祭壇に捧げられるキリストの体と血の秘跡 *sacramentum corporis et san-*

guinis Christi に限定しながらアウグスチヌス自身の考えを見てゆきたい。

1

「神の国」の第十巻で、アウグスチヌスは、いけにえを、神と幸福を求める人間との関係のなかで最も重要なことがらであると考えている。そうして、真のいけにえを捧げるのは、唯一の神に対してのみである⁶⁾。その神に捧げられる、「真のいけにえとは、われわれを聖なる交わりによって神につくようにするもの、すなわち、われわれを真に幸福にしうるその善の目的に関係づけられたすべてのわざである⁶⁾」。神の掟として旧約のもとに見られる、幕屋か神殿での祭のとき捧げられるいけにえのさまざまなことも、「その意味するところによって、神と隣人とに対する愛を指しているのである⁷⁾」。人間の捧げるいけにえよりもいけにえによって示される謙遜と痛悔の心が神のよみするところであり、そのことはさらに「いけにえと皆から呼ばれるものは、真のいけにえのしるし⁸⁾」にすぎないことを意味している。

したがって、いかなる意味でも、それらのいけにえ自体が神と人間を結びつけるのではない。「神は、家畜やその他の腐敗する地上の何ものも、また人間の義さえも必要としないと信じなければならないし、神を正しく礼拝することも、人間のためにはなっても、神のためではない。人が水を飲んでも泉に、光を見ても光に役立ったといえないからである⁹⁾。」掟でいけにえが命じられていても、それらいけにえそのものが要求されているのではなく、憐みの心が、また悲しみに打ち砕かれた謙遜と痛悔の心が必要なのである。そうして、謙遜と痛悔の心が要求されているということは、結局、真のいけにえの現実がそこにもないことにはかならない。二重の意味で、「見えるいけにえは、見えないいけにえの秘跡すなわち聖なるしるし *sacrum signum* である¹⁰⁾」と考えねばならない。

これらすべてのいけにえを、神に対するいけにえとならしめる究極的なものは、ただキリストのいけにえのみである。「その真の仲介者—奴隷の形をとって神と人間との仲介者となったかぎりでの人間キリスト・イエズス—は、神の形をとって、父とともにいけにえを受け取り、父とともに唯一の神であるが、

奴隷の形にあっては、このさい、いかなる被造物にもいけにえを捧げてはならないと考えさせるために、いけにえを受け取るよりも、いけにえになることを選んだのである。このことから、キリストは、自分を捧げる者として司祭であり、また自分自身がいけにえの捧げ物である¹¹⁾。

このキリストによって人間が贖われたのであり、人間が神にいけにえを捧げることにはじめて意味が与えられたのである。ところでキリストに贖われた人々の全体、すなわち聖者らの集まり *congregatio societasque* が、キリストを頭とする神秘体であり、その意味で、キリストが自分を捧げるということは、キリストが、贖われた人々全体を自分の体として捧げることでもある。この捧げものこそ、最後の普遍的ないけにえ *universale sacrificium* である。またそれは、キリストの体である教会が自分を捧げることでもある。このことがら、毎日の祭壇の秘跡によって示されている¹²⁾。

2

神へのすべてのいけにえは、キリストが十字架上で自分自身を神に捧げたということによって意味を与えられた¹³⁾。それゆえ、十字架上のキリストは、あらゆるいけにえの中心であり、また唯一の絶対的な真のいけにえである。旧約のいけにえは、この歴史的に1回的な十字架上のキリストのいけにえの到来を告げるものであり、新約では、この「すでに成就した〔キリストの〕いけにえの記念を、キリストの体と血との至聖なる奉献と受領とによって祝うのである¹⁴⁾。」

「あなたがたが祭壇の上に見るパン、神のことばによって聖化されたパンは、キリストの体である。神のことばによって聖化された杯、というよりも杯の中にあるものは、キリストの血である。

主キリストは、それらのものによって、自分の体と、われわれの罪のゆるしのために流された自分の血を授けようと欲した。

あなたがたがよく受けるならば、あなたがた自身も、あなたがたの受けたものである¹⁵⁾。」

聖餐は、まず、かつて十字架上のいけにえとしてのキリストの体と血を、祭

壇に奉獻されたパンと葡萄酒と、その受領によって記念する秘跡 sacramentum である。

また、聖餐は、キリストを頭としわれわれを肢体とするキリストの体全体をいけにえとして捧げるということがらの秘跡 sacramentum でもある。

しかし、「見えるいけにえが見えないいけにえのしるし」であっても、この祭壇の上に見られる、神のことばによって聖化されたパンと葡萄酒が単なるしるしでしかないということにはならない。聖化されたパンと葡萄酒が何らかのあり方で、キリストの体と血であるからこそ、その受領によってキリストの体に与るという意味が強められる¹⁶⁾。聖餐のパンと葡萄酒に対するアウグスチヌスの意識は、しばしば、意味するものよりも、意味されたことがらにより強く働くとしても、祭壇の上に奉獻されたパンと葡萄酒も、やはりそれ自体、かれにとって絶対的な真のいけにえである¹⁷⁾。

3

聖餐のパンと葡萄酒が、歴史の中でかつて十字架上に捧げられたキリストのいけにえを意味するということが、そこから人々が聖餐に与ることによってキリストを頭とするキリストの体の肢体となることによって、その全キリスト *Christus Totus* そのものが神に捧げられるといういけにえを意味すること、聖餐の秘跡の指し示すこの二つのことがら *res* は¹⁸⁾、アウグスチヌスによって強く意識され、明確に表現されているが、この聖化されたパンと葡萄酒そのものがキリストの体との関係において何か、ということについてのアウグスチヌスの表現は多義的である¹⁹⁾。

聖餐のパンが永遠の生命としてのキリストの体を意味することは明きらかでも、旧約のマンナもキリストの体を意味している。また旧約の、岩から湧き出た水は、キリストの脇腹より迸る血を指している²⁰⁾。

また、聖餐のパンがキリストの体としての教会を意味しているとしても、パンが小麦粒から作られて一つのパンになることと、人々が洗礼を受け聖餐に与って唯一のキリストの体・教会となることとはそのキリスト自身とのあいだの関係は、同じあり方ではない。

「もし秘跡がその秘跡の指すそのもの自体の何らかの類似をもたないならば、秘跡はまったく何ものも意味しないであろう。秘跡はたいいていその類似からそのものの名をうけるのである。それゆえ、何らかの様態にしたがってキリストの体の秘跡がキリストの体であり、キリストの血の秘跡がキリストの血であるように、信仰の秘跡は信仰である²¹⁾」。聖餐と洗礼に共通して、秘跡と、秘跡の示すものとのあいだに何らかの関係はあっても *secundum quemdam modum*, 両者における関係の仕方が同じあるとは断言できない。「カルタゴのキリスト者たちが、洗礼そのものを救いとのみ呼び、キリストの体の秘跡を生命と呼んでい²²⁾」ても、祝福された水は、聖餐の葡萄酒と同じあり方と同じではない²³⁾。

聖餐のパンと葡萄酒が特別なあり方でキリストの体と血であるとする意識がアウグスチヌスにおいて強く働いていることは容易に指摘できる。たとえば、詩篇の註解で、アウグスチヌスは、「主の足の踏台を礼拝せよ」という一節から主の踏台が地を意味し、何故に地が礼拝されるのかを説明しようとする。肉体は地に属するが、主は肉体をマリアから受け取り、その肉体をもってこの世に住み、その肉体を救いの食物としてわれわれに与えた。その肉体を食するのは、礼拝をして後のことであるから、その肉体を、したがってその地を、その主の足の踏台を礼拝せねばならない²⁴⁾。そこから、聖餐のパンが礼拝の対象とされることが認められることから、そこに少くとも単に抽象的な理念としてのキリストではなくキリストの具体的な体の何らかの現存が認められていることを帰結するのは不可能ではない²⁵⁾。

また、聖餐のパンと葡萄酒に対して、「自分が何に近づいているか、何 *quid* を食し、何を飲んでいるか、というより、だれ *quem* を食し、だれを飲んでいるかをあなたは知っている²⁶⁾」。外観は他と同じでも、「すべてのパンがそうなるのではなく、キリストの祝福を受けたパンがキリストの体となる²⁷⁾」のである。

聖餐において、パンがキリストの体になるとき、キリストの祝福、神のことが、奉献が関与している。しかし、アウグスチヌスは、聖餐にしばしば触れながら、聖餐の祭式そのものについては、信者たちの知っている、新しく洗礼を受けた者たちの見ているという以外にほとんど述べることがない。まれなこと

であるが、アウグスチヌスは Paulinus Nolanus に宛てた書簡のなかで、当時のはほとんどすべての教会の伝統として、「主の祭壇にあるものの祝福が始められる前にわれわれが秘跡の祭式でするのを祈願 *praecationes* と解し、祝福され、聖化されて、分配のために分けられたとき、主の祈りによって結ぶすべての祈願を懇願 *Orationes* と解する²⁸⁾」とかがたっている。また、聖餐の秘跡においても十字架のしるしが必要である²⁹⁾。しかしこれらのことも、聖霊の働きなしには不可能である³⁰⁾。

聖餐のパンと葡萄酒がその外観をまったく変えることなしに、如何なる経過によってキリストの体と血になるのか、この問題が意識的に反省されるのは後世の神学によってであり、その解決もまた後世のまた神学上の新しい概念を媒介としてはじめてなされた。アウグスチヌスは、聖餐についての理解を彼独得の優れた思索によって深めたとしても、この方向にむけて解決の道を押し進めたとは考えられない³¹⁾。しかし、少くともアウグスチヌスにおいて、聖餐のパンと葡萄酒のいけにえは過去を想い起す単なる追憶ではなく、あくまでそこにキリストが現実に捧げられるものとして理解されている。

聖餐についてのアウグスチヌスの説明は、しばしばその時の事情による彼の特定の関心からなされる。ドナチストに対する論争から、彼が聖餐の秘跡について考えるとき、聖餐そのものについて考察するよりも、一気に秘跡の指し示すもの、教会の一致についての考えに飛躍しがちである³²⁾。また、一つのパンの如きしるしそのものの比喩的な解釈にも特に強い関心がはらわれる³³⁾。

しかし、これら個々の考えの背後に、それぞれに統一的な位置を与える構造的な思考の過程を置くこともできよう。アウグスチヌスの考えは、その過程にしたがって比較的自由に往来することができるのであろう。現実に対してそのしるしに過ぎないもの *sacramentum, id est sacrum signum*. しるしであると同時に一つの現実であるもの *sacramentum et res*, しるしが指し示す現実 *res*, さらにその人間に対する効果 *virtus* として理解することができる。

したがって、聖餐についてのアウグスチヌスの論理が一見不明瞭であるとすれば、それは、ときにはむしろ彼の雄弁ともいうべき思考、表現の方法に依るであろう。以上の四つの枠の一つの中で語りながら同時に他の枠の意味を想起さ

せる彼の思想の表現方法が与える結果にすぎない³⁴⁾。

ヨハネ福音書講解（第二十六講，第二十七講）におけるごとく，アウグスチヌスの関心が直ちに，霊的な食物，あるいはキリストの神秘体に向けられたとしても，そのことが同時に祭壇に捧げられたパンと葡萄酒の現実としてのキリストの体と血という考えと矛盾するのではない。聖餐はいけにえそのものにとどまらず，聖餐によって，キリストにとどまり，キリストもその者にとどまるということは，「よく食し，よく飲む者」をそのことによって強め，永遠の生命を得させる効力でもある³⁵⁾。

また聖餐は，幼児にとっても，幼児洗礼と同じく，永遠の生命を得るのに必要である³⁶⁾。

死者のために捧げられる聖餐のいけにえは，死者が，永遠の罰を受けていないかぎり，死者にとって有益である³⁷⁾。

4

アウグスチヌスにとって，聖餐に与りそのパンを食することは「現存するキリストを受領するに止らず，ることは，十字架上のいけにえを通して，キリストを頭とするキリストの体となり，聖餐に与る人々自身もまたいけにえとされて神につくことである。そのキリストは，歴史のただなかで十字架の上に自らを捧げることによって，かつて一人のアダムによって罪がすべてその上に及んだ人間を神と和解させ，キリストの死と復活によってわれわれに，洗礼によって罪に死し，新しく生れかわることを可能にした。しかし，この世にあって人間は未だ充全なる意味で神についてはいない。ただひとり，真のいけにえであり真の大司祭であるキリストのみ復活と昇天によって神の右に座し，すなわち神についた。この完全ないけにえによって，キリストは，自らの肢体たる人間の来たるべき完成のために，神の右にあって神にとりついている。それ故聖餐は，全キリストの完成を待望する現在の教会そのものの秘跡でもある。

いまはキリストは「ただひとり死者より最初に生れて，体の復活ののち父の右にあって，われわれの祈りの代願者であり司祭である。他の肢体が終末に向って彼にしたがうために，教会の頭は天上にいる。

(Solus enim est adhuc primogenitus a mortuis, post resurrectionem corporis ad dexteram Patris, pontifex et advocatus precum nostrarum. Caput Ecclesiae sursum est, ut caetera membra sequantur in finem.)」 Sermo 75, c. 2, n. 3.

註

- 1) Matth., 26 : 26-28, Marc, 14 : 22-24, Luc, 22 : 15-20, ICor., 11 : 22-25 (C.10~C.12) Rom., 12 : 4-5, Joh, 6 : 22-71.
- 2) 信者以外の者には、聖餐の秘跡について知らせない慣習、たとえば、de Trinitate l. 3, c. 10 n.21, cf Oeuvres de s. Augustin (Bibl. Aug.) t.15, p.582, note complémentaire 28, Infantes.
- 3) sacramentum corporis et sanguinis Christi, sacramentum altaris, ここでは sacramentum の訳を秘跡とするが、七つの秘跡のように特別な意味をもたない。cf Portalié : Augustin, in Dict. Théol. Cath. t.1part.2 col. 2416-2418.
- 4) 特に Sermones 227, 272. Morin ; Sancti Augustini sermones post Maurinos reperti : Miscellanea Augustiniana vol. I, Roma 1930 のものは、J. Solano : Textos eucaristicos primitivos, II (B.A.C.) Madrid, 1954 に依る。
- 5) De civitate Dei, l. 10, c. 1-4.
- 6) ibid. c.6, Bibl. Aug., t. 34, p. 444.
- 7) ibid. c. 5 : Quaecumque igitur in ministerio tabernaculi sive templi multis modis de sacrificiis leguntur divinitus esse praecepta, ad dilectionem Dei et proximi significando referuntur.
- 8) ibid. ; illud, quod ab omnibus appelletur sacrificium, signum et veri sacrificii.
- 9) ibid., p. 440.
- 10) ibid. : sacrificium ergo visibile invisibilis sacrificii sacramentum, id est sacrum signum est.
- 11) De civ. Dei l. 10, c. 20 p. 498 cf ibid. c. 6 p. 446-8, De Trinitate l. 4. c. 14, op. cit., p. 388 : Ut quoniam quatuor considerantur in omni sacrificio : cui offeratur, a quo offeratur, quid offeratur, pro quibus offeratur, idem ipse unus verusque mediator, per sacrificium pacis reconcilians nos Deo, unum cum illo maneret cui offerebat, unum in se faceret pro quibus offerebat, unus ipse esset qui offerebat, et quod offerebat.
Enarr. 2 in Ps. 29, PLt. 36, col. 216 : Inter illam Trinitatem et hominum infirmitatem et iniquitatem mediator factus est homo, non iniquus, sed tamen infirmus : ut ex eo quod non iniquus, jungeret te Deo …… , ex eo quod infirmus, propinquaret tibi.

- 12) De civ. Dei l. 10, c. 20 p. 498: Cuius rei sacramentum cotidianum esse voluit ecclesiae sacrificium, quae cum ipsius capitis corpus est, se ipsam per ipsum discit offerre. cf l. 10, c. 6 p. 448
- 13) De Trinitate l. 4, c. 13, n. 17, Bill, Aug. 15, p. 382: Morte sua quippe uno verissimo sacrificio pro nobis oblato, quidquid culparum erat unde nos principatus potestates ad luenda supplicia jure detinebant, purgavit, abolevit, exstinit.
- 14) Contra Faustum mani. l. 20 c. 18 PLt. 42, col. 383.
Sermo (Denis n. 3; 2 PLt. 46. Morin p. 18 ss) B.A.C. p. 215: Christus ergo dominus noster, qui obtulit patiendo pro nobis quod nascendo accepit ex nobis, princeps sacerdotum factus in aeternum, sacrificandi dedit ordines quem videtis, corporis utique et sanguinis sui. Nam percussum lancea corpus eius aquam et sanguinem emisit, quo peccata nostra dimisit. Huius gratiae memores, vestram ipsorum salutem operantes, quoniam deus est qui operatur in vobis, cum timore et tremore ad participationem huius altaris accedite. Hoc agnoscite in pane, quod pependit in cruce: hoc in calice, quod manavit ex latere. Nam et illa vetera sacrificia populi dei hoc unum venturum multiplici varietate figarabant.
- 15) Sermo 227 PLt. 38. col. 1099: Panis ille quem videtis in altari, sanctificatus per verbum Dei, corpus est Christi. Calix ille, immo quod habet calix, sanctificatum per verbum Dei, sanguis est Christi. Per ista voluit Dominus Christus commendare corpus et sanguinem suum, quem pro nobis fudit in remissionem peccatorum. Si bene accepistis, vos estis quod accepistis.
- 16) cf P. Th. Camelot, Réalisme et symbolisme dans la doctrine eucharistique de s. Augustin, in Revue des Sciences philos. et théol. t. 31, 1947, p. 410 (pp.394-410).
- 17) 地上でのキリストの十字架上の死が、神に捧げられた絶対的な真のいけにえであるが、このキリストの秘跡である聖餐のいけにえも、やはりいけにえとして絶対的な真なるものである。
De spiritu et littera, c. 11, n. 18 PLt. 44, col. 211: dei cultus in ipso verissimo et singulari sacrificio, Domino Deo, apere gratias admonemur, 註 (13) Morte sua quippe uno verissimo sacrificatio pro nobisobl ato. cf. J. Lécuyer: Le sacrifice selon saint Augustin, in Augustinus Magister, Paris 1954, p. 905 ss,
- 18) cf. 註33
- 19) 対立した諸解釈については、G. Bareille: Eucharistie d'après les Pères, l'article Eucharistie, in D.T.C. t. 5 part. 2, col. 1174 s. を参照。
- 20) アウグスチヌスにおける旧約と新約の sacramentum の意味について、特に旧約のなかで新約の sacramentum との関係については、C. Couturier: "Sacramentum" et "Mysterium" dans l'oeuvre de saint Augustin, in Etudes Augustiniennes, Paris, Aubier, 1953 の Sacramentum-rite p. 178 s.

- 21) Epist. 98, n. 9 PLt. 33, col. 363: 幼児洗礼の意義を説明するために復活祭にふれて,
..... Si enim sacramenta quamdam similitudinem rerum earum, quarum sacramen-
ta sunt, non haberent, omnino sacramenta non essent. Ex hac autem similitu-
dine plerumque jam ipsarum rerum nomina accipiunt. Sicut ergo secundum
quemdam modum sacramentum corporis Christi corpus Christi est, sacramentum
sanguinis Christi sanguis Christi est, ita sacramentum fidei fides est.....
- 22) De peccat. meritis I.1, c. 24, n. 34, PLt. 44, 128
- 23) たとえば, sacramentum salis cf Bareille, op. cit. col. 1177. P. Batiffol: Etudes
d'histoire et de théologie positive, 2e série, l'eucharistie, la présence réelle et la
transsubstantiation, 1930¹⁰, p. 436.
- 24) Enarr. in Ps. 98, n. 9 PLt. 37, col. 1264. これと平行したアンブロジウスの表現はより
明確である。Ambrosius, De Spiritu Sancto I.3, c.11, n. 79 PLt.16 col. 828-829:
per terram autem caro Christi, quam hodie in mysteriis adoramus et quam apos-
toli in Domino Jesu adorarunt. cf Portalié, op. cit. col. 2420
- 25) しかし, アウグスチヌスにおいて, キリストが現存するということばの意味に特定
の限定を与えることはできない。
Ubi voluit Dominus agnosci? In fractione panis Noluit agnosci, nisi ibi;
propter nos, qui non eum visuri eramus in carne, et tamen manducaturi eramus
ejus carnem *Absentia Domini, non est absentia: habeto fidem, et tecum est
quem non vides.* Illi, quando cum eis Dominus loquebatur, nec fidem habent:
quia *cum resurrexisset non credebant, non resurgere posse sperabant.* Sermo
235, PLt. 38, 1118-9.
Habes Christum in praesenti per fidem, in praesenti per signum, in praesenti
baptismatis sacramentum, in praesenti per altaris cibum et potum. In Joh. tr. 50,
per n. 12, PLt. 35 1764 等, cf. P.Th. Camelot; op. cit. p. 409.
- 26) Sermo 9, n. 4 PLt. 38, col. 85.
- 27) Sermo 234, n. 2 PLt. 38, col. 1116. cf. Contra Faust. l. 20, c. 13 PLt. 42, col. 379:
Noster autem panis et calix, non quilibet sed certa consecratione mysticus
fit nobis, non nascitur.
- 28) Epist. 149, n. 16, PLt. 33, col. 636. 聖化されるとき of orationes のなかに, 特別のこ
とば (アウグスチヌスの洗礼では, *Detrahe verbum, et quid est aqua nisi aqua?*
*Accedit verbum ad clementum (淡水), et fit sacramentum, etiam ipsum tanquam
visibile verbum,* In Joh. tr. 80, n3, PL 35, 1840. *Certa illa evangelica verba, sine
quibus non potest baptismus consecrari, De baptism. contra donatistas, l. 6, c. 25,
PLt. 43, 214, ibid l.6, c. 17: Deus adest evangelicis verbis suis, et ipse sancti-
ficat sacramentum suum. etc の verbum) を考えることは不自然ではない。
Sermo 227: sanctificatus per verbum Dei. Sermo de sacramento altaris ad in-*

fantes (Denis, n. 6 PL 46, 834-836, B.A.C. p. 21 8, pp. 220-221)n.3 :

Et inde jam, quae aguntur in precibus sanctis, quas audituri estis, ut *accedente verbo fiat corpus et sanguis Christi. Nam tolle verbum, panis est et vinum. Adde verbum, et jam aliud est.* Et ipsum aliud quid est? Corpus Christi et sanguis Christi. Tolle ergo verbum, panis est et vinum. Adde verbum, et fiet sacramentum. Ad hoc dicitis : Amen.....Deinde dicitur oratio dominica. cf De trinitate l. 3, c. 4, n. 10 Bibl. Aug. 15 p. 290 : illud tamen quod ex fructibus terrae acceptum et prece mystica consecratum rite sumimus. cf. S. Salaville : l'article *Épiclèse eucharistique*, col. 241-242, in Dict. Theo. Cath. t.5, 1ère partie. 以上二つの sermons のなかの本文の正統性について、反対の立場がある。cf. J. Turmel : *Histoire des dogmes* t.5, Paris 1936, p. 317-318.

- 29) In Joh. tr. 118, n5 PLt. 35 col. 1590.
- 30) De trinitate l.3, c.4, n. 10 Bibl. Aug. 15, p. 290 : cum per manus hominum ad illam visibilem speciem perducatur, non sanctificatur ut sit tam magnum Sacramentum, nisi operante invisibiliter Spiritu Dei.
- 31) かなり明確な図式をもつものとしては、 G. Bareille : op. cit. col. 1151 ss. 特に col. 1154-1158
- 32) cf P. Batiffol : op. cit. p. 453 ibid. p. 438-p.443 cf P. Th. Camelot, op. cit. p. 410.
- 33) cf. P. Th. Camelot, ibid. p. 409. しかし現代、定義されているほど限定された意味ではない。cf L. Otto : *Grundriss der Dogmatik* 1954, 仏訳 Editions Salvator 2^e 1955, p. 460
- 34) cf Bibl. Aug. 37, p. 46ss. Note complém. 46 une transition. sacramentum と mysterium, しるしは、古代の人々、特にアウグスチヌスにとって、それが意味するところのものと判然と区別されたものではない。P. Th. Camelot op. cit. p. 410.
- 35) In Joh. tr. 27, n. 12. exorcisme : De civ. Dei l. 22, c. 8, n. 7.
- 36) De peccat. meritis l. 1 c. 24, n. 34, PLt. 44, col. 128.
- 37) Enchiridion n. 110.